

1P89

重症心身障がい児・医療的ケア児を対象とした児童発達支援事業所に勤務する看護職の役割と課題

原島 郁実

医療法人財団はるたか会 訪問看護ステーションそら

目的：

重症心身障がい児・医療的ケア児を対象とした児童発達支援事業所に勤務する看護職がどのように多職種や子どもと関わっているのかを記述し、看護職の役割と課題を考察する。

方法：

鯨岡が提唱するエピソード記述を用いた質的記述的研究を行った。フィールドワークにて研究者も多職種や子どもと関わりながら、そこで起きた事象を「あるがまま」に捉えつつ、研究者が自身を通してそこに何かを感じ取っていくという態度にて観察を行い、研究者が印象に残った場面をエピソードとして書き起こし、看護職の役割と課題について考察した。

倫理的配慮・対象者：

研究者が所属していた大学院の研究倫理審査会の承認を得て研究を行った。研究者が非常勤として勤務していた児童発達支援事業所を研究協力機関とし、研究対象者は研究協力機関で働く職員とそこに通う子ども及び保護者で、研究協力依頼を文書と口頭で行い同意が得られた専門職13名、非専門職4名、そこに通う子ども及び保護者11名である。

結果：

児童発達支援事業所に勤務する看護職は、個別性に応じたアセスメントやケアを実施しているが、ルーチンなケアが多いために非医療職にはアセスメントを行っていることが伝わりにくく、非医療職は経験の浅い看護職が医療的な判断ができるかと不安に感じていた。また、人工呼吸器を装着している子どもが活動するということは事故が生じうる可能性があり、リスクを心配しすぐに対応できるよう近くにいる看護職と非医療職が活動に伴うリスクを最小限にする行動を取っているのかを確認し離れる看護職がいた。そして、子どもの状態が変化した際は非医療職が看護職に対応を求め、急変時には看護職は専門性を発揮しケアを行っていた。

考察：

児童発達支援事業所に勤務する看護職は、発達支援を提供する活動に伴う様々なリスクを考慮しながらも、遊びを制止するのではなく支援するという形で関わり、非医療職と情報を共有していた。また、医療的ケアが必要な子どもは、生活の場で状態が落ち着いていても時に急変し、看護職にはその対応を求められる。その一方で、非医療職は看護職によって力量に差があり、医療的な判断を依頼することに不安を感じていた。勤務する看護職も経験年数や知識・技術に差があり、急変時対応という高度なスキルを求められることに対し不安を感じる可能性が高いため、経験が浅い看護職へのフォローアップなどの支援は急務である。

1P90

保育者・教員を目指す大学生の医療的ケア児に対する意識に関する検討

八木 麻理子

甲南女子大学 人間科学部 総合子ども学科

【はじめに】

近年、医学の進歩と医療の発展により、小児期に死亡する子どもの数は減少した一方、救命できたものの障害や疾患を持って生活する子どもの数は増加している。この中に含まれる医療的ケア児（医ケア児）は、2018年（0～19歳：19,712人）には2008年の約2倍に増加している。地域で生活する医ケア児の増加に伴い、保育士や教員が医ケア児に関わる場面が増えることが予想される。医ケア児が社会生活を送る上で、福祉・教育・医療の連携が不可欠であり、より円滑な連携のためには、各分野の課題を明らかにし対応策を検討し実践する必要がある。今回、医ケア児を育てる保護者による講演後、学生が提出した感想文を分析し、保育者や教育者を目指す大学生の障害児や医ケア児に対する意識を検討することを目的として研究を行った。

【対象と方法】

対象は、医ケア児を育てる保護者による講演会を3年次に受講し、受講後の感想文を用いた本研究への参加に同意した、保育者、教員の資格取得を目指す大学生108名。感想文内容をテキストマイニング法により分析した。テキストマイニングソフトはKH Coderを使用した。本研究は甲南女子大学研究倫理委員会の承認を得ている（承認番号：2019036）。

【結果と考察】

感想文内容の形態素解析の結果、抽出語の異なり語数は1,708語、平均出現回数は7.71±26.1回であった。+1SD（33回）以上出現した抽出語の関連性を分析し、文書のクラスター分析からクラスター毎の特徴語を抽出した。抽出語と文書の分析結果からコーディングルールを作成し感想文内容を検討した。障害に対する考え方に関する記述、障害児を持つ母親の思いに関する記述は100%、障害児と家族への日常生活支援に関する記述、学生自身の今後に活かすとする内容は98%、医療的ケアを含むケアに関する記述は94%、保護者の障害受容に関する記述は85%、実際の生活の様子に関する記述は85%、障害児の学校や地域での生活に関する記述は62%で見られた。多くの学生は、医ケア児に関して教科書的な知識のみで、保護者から直接その思いや実生活について聞いた経験はなく、医ケア児との関わりについて具体的に考える機会となったと考えられた。医ケア児のみならず障害児について具体的に考える機会を学生に提供することは、福祉・教育・医療のより良い連携への一歩になると考えられる。